

第 4 章

圏論とトポロジカル相

この節で登場する多様体は特に断らない限り常に C^∞ 多様体である。また、体 \mathbb{K} と言ったら $\mathbb{K} = \mathbb{R}, \mathbb{C}, \mathbb{H}$ のいずれかを指すことにする。

4.1 gapped な量子液体の定義

この節では常に $d := D + 1$ 次元時空 $\mathcal{M}^{(d)} = \Sigma^{(D)} \times \mathbb{R}$ または $\Sigma^{(D)} \times S^1$ を考える^{*1}。混乱が生じない時は時空点を $x := (x, t) \in \Sigma^{(D)} \times \mathbb{R}$ と書く。境界を持たない D 次元多様体^{*2} $\Sigma^{(D)}$ はノルム $\|\cdot\|$ を持つ距離空間であるとする。

- $\Sigma^{(D)}$ 上の D 次元格子 (lattice) $\Lambda \subset \Sigma^{(D)}$ とは、 $\Sigma^{(D)}$ の有限な^{*3} 離散部分集合のことである。
- 格子点 $x \in \Lambda$ 上の Hilbert 空間を \mathcal{H}_x と書く。
- 全系の Hilbert 空間とは、合成系 $\mathcal{H}_{\text{tot}} := \bigotimes_{x \in \Lambda} \mathcal{H}_x$ のことである。

定義^{ph} 4.1: bosonic な格子模型

D 次元格子 $\Lambda \subset \Sigma^{(D)}$ を 1 つ固定する。

- $\forall x \in \Lambda$ を 1 つとる。別の格子点 $y \in \Lambda$ が x についてレンジ $R > 0$ であるとは、 $\|x - y\| \leq R$ が成り立つことを言う。 x についてレンジ R な格子点全体の集合を $N_R(x) \subset \Lambda$ と書く。
- 格子 Λ 上のレンジ $R > 0$ の bosonic な格子模型 (bosonic lattice model) とは、エルミート演算子 $\hat{H}_\Lambda \in \text{Hom}_{\text{Hilb}}(\mathcal{H}_{\text{tot}}, \mathcal{H}_{\text{tot}})$ であって以下の条件を充たすもののことを言う：
(locality) $\forall x \in \Lambda$ に対して、 $\forall y \in N_R(x)$ における局所的 Hilbert 空間 \mathcal{H}_y にのみ非自明に作用するエルミート演算子 $\hat{h}_x \in \text{Hom}_{\text{Hilb}}(\mathcal{H}_{\text{tot}}, \mathcal{H}_{\text{tot}})$ が存在して、

$$\hat{H}_\Lambda = \sum_{x \in \Lambda} \hat{h}_x$$

と書ける。

^{*1} i.e. 時間方向は必要に応じてコンパクト化する

^{*2} コンパクト性は仮定しない。

^{*3} 空間多様体 $\Sigma^{(D)}$ や局所 Hilbert 空間に適当な境界条件を課して有限にする。

- D 次元の **bosonic な量子系** (bosonic quantum system) とは,
 - 格子の増大列^a $\{\Lambda_i\}_{i=1}^\infty$
 - bosonic な格子模型の列 $\{\hat{H}_{\Lambda_i}\}_{i=1}^\infty$
 の組のこと.

^a i.e. $\Lambda_1 \subsetneq \Lambda_2 \subsetneq \dots$ が成り立つ.

定義^{ph} 4.2: gapped な量子系

bosonic な量子系 $(\{\Lambda_i\}_i, \{\hat{H}_{\Lambda_i}\}_i)$ が **gapped** であるとは, ある $\Delta > 0$ および E_0 が存在して以下の条件を満たすことを言う (図 4.1):

(gap-1) $\forall E \in (E_0, E_0 + \Delta)$ に対してある $M_E \in \mathbb{N}$ が存在して,

$$i > N_E \implies \text{Spec}(\hat{H}_{\Lambda_i}) \cap (E_0, E_0 + \Delta) = \emptyset$$

が成り立つ.

(gap-2) $\forall \varepsilon > 0$ に対してある $N_\varepsilon \in \mathbb{N}$ が存在して,

$$i > N_\varepsilon \implies \text{diam}(\text{Spec}(\hat{H}_{\Lambda_i}) \cap (-\infty, E_0]) < \varepsilon$$

が成り立つ.

特に, 十分大きな $i \in \mathbb{N}$ について定まる

$$\text{GSD}_{\Lambda_i}(\{\hat{H}_{\Lambda_i}\}) := |\text{Spec}(\hat{H}_{\Lambda_i}) \cap (-\infty, E_0]|$$

のことを**基底状態の縮退度** (ground state degeneracy) と呼ぶ.

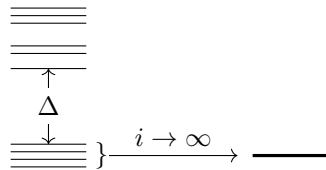


図 4.1: gapped な量子系のエネルギースペクトル $\text{Spec}(\hat{H}_{\Lambda_i})$

定義^{ph} 4.3: gapped quantum liquid

gapped かつ **bosonic な量子系** $(\{\Lambda_i\}_i, \{\hat{H}_{\Lambda_i}\}_i)$ が **gapped な量子液体** (gapped quantum liquid) であるとは, ある $N \in \mathbb{N}$ が存在して

$$\text{GSD}_{\Lambda_N}(\{\hat{H}_{\Lambda_i}\}) = \text{GSD}_{\Lambda_{N+1}}(\{\hat{H}_{\Lambda_i}\}) = \text{GSD}_{\Lambda_{N+2}}(\{\hat{H}_{\Lambda_i}\}) = \dots < \infty$$

が成り立つことを言う.



gapless quantum liquid の定義は、2025 年現在でもこれといったものがない。

【例 4.1.1】Haah コード

Haah コード [?] の基底状態の縮退度は

$$\ln(\text{GSD}_{\Lambda_i}) \sim |\Lambda_i|$$

と振る舞うことが知られており、gapped だが gapped な量子液体でない bosonic な量子系の例である。

量子相 (quantum phase) とは、大雑把には $\Sigma^{(D)} = \mathbb{R}^D$ としたときの gapped な量子液体の同値類のことである。この同値類の正確な定義を与えるのは大変困難だが、[?, p.3] に倣うと以下のようになる：

定義^{ph} 4.4: bosonic な量子相

$\Sigma^{(D)} = \mathbb{R}^D$ における 2 つの gapped な量子液体 $(\{\Lambda_i\}_i, \{\hat{H}_{\Lambda_i}^{(0)}\}_i)$, $(\{\Lambda_i\}_i, \{\hat{H}_{\Lambda_i}^{(1)}\}_i)$ を与える。熱力学極限をとった gapped な量子液体全体がなす集合を $\text{gQL}(\Sigma^{(D)})$ とおく。 $\text{gQL}(\Sigma^{(D)})$ には適切な位相を入れて位相空間にする。

このとき、 $\hat{H}_{\Lambda_\infty}^{(0)}$ と $\hat{H}_{\Lambda_\infty}^{(1)}$ が同じ量子相 (quantum phase) にあるとは、連続曲線 $\hat{H}: [0, 1] \rightarrow \text{gQL}(\Sigma^{(D)})$ が存在して $\hat{H}(0) = \hat{H}_{\Lambda_\infty}^{(0)}$ かつ $\hat{H}(1) = \hat{H}_{\Lambda_\infty}^{(1)}$ を満たすことを言う。

4.1.1 SRE 状態と LRE 状態

まず、[?, p.3] に倣って **SRE 状態** (Short Range Entangled states) と **LRE 状態** (Long Range Entangled states) を定義する。[?, p.4]

予想 4.1: Chen-Gu-Wen の仮説

bosonic かつ gapped な 2 つの基底状態 $|\Phi_0\rangle, |\Phi_1\rangle$ が同じ量子相にあるならば、以下の条件を満たす bosonic な格子模型の族 $\{\hat{H}(t)\}_{t \in [0, 1]}$ が存在する：

- $\forall t \in [0, 1]$ に対して、 $\hat{H}(t)$ の基底状態は熱力学極限を取った際に gapped である。
- $|\Phi_0\rangle, |\Phi_1\rangle$ はそれぞれ $\hat{H}(0), \hat{H}(1)$ の基底状態である。

命題 4.1: LU transformation

以下の 2 つは同値である：

- (1) bosonic かつ gapped な 2 つの基底状態 $|\Phi_0\rangle, |\Phi_1\rangle$ が同じ量子相にある
- (2) bosonic な格子模型の族 $\{\hat{H}(t)\}_{t \in [0, 1]}$ が存在して

$$|\Phi_1\rangle = \mathcal{T}[e^{-i \int_0^1 dt \hat{H}(t)}] |\Phi_0\rangle \quad (4.1.1)$$

を満たす。ただし \mathcal{T} は経路順序積である。

証明 (\implies)

仮説 4.1 による.

(\impliedby)

■

(4.1.1) を局所ユニタリ発展 (local unitary evolution) と呼ぶ.

定義 4.1: SRE 状態

bosonic かつ gapped な基底状態 $|\Phi\rangle \in \text{Gnd}(\Sigma^{(D)})$ が SRE 状態 (short range entangled state) であるとは, ある separable な状態

$$\bigotimes_{\mathbf{x} \in \Lambda} |\psi_{\mathbf{x}}\rangle \quad \text{w/} \quad \forall \mathbf{x} \in \Lambda, |\psi_{\mathbf{x}}\rangle \in \mathcal{H}_{\mathbf{x}}$$

と $|\Psi\rangle$ との間に局所ユニタリ発展が存在すること.

SRE 状態でない基底状態のことを LRE 状態 (long range entangled state) と呼ぶ.

定義から明らかに, 任意の SRE 状態は同一の量子相に属する.

4.1.2 Bosonic SPT 相

SRE 状態の定義はそのままだと面白くないが, 対称性を考慮すると話は変わってくる. 位相群 G を与える. また, 格子 Λ は空間群 S の対称性を持つ^{*4}とする.

定義 4.2: 外部半直積

N, H を群とし, $\phi: H \rightarrow \text{Aut } N, h \mapsto \phi_h$ を準同型写像とする^a. このとき, 集合 $N \times H$ は次の二項演算 $\cdot: N \times H \rightarrow N \times H$ に関して群を成す:

$$(n_1, h_1) \cdot (n_2, h_2) := (n_1 \phi_{h_1}(n_2), h_1 h_2)$$

この群 $(N \times H, \cdot, (1_N, 1_H))$ のことを N, H の (外部) 半直積 (semidirect product) と呼び, $H \ltimes_{\phi} N$ または $N \rtimes_{\phi} H$ と書く.

^a $\text{Aut } N$ は, N から N 自身への同型写像全体の集合に, 写像の合成を群の演算として群構造を入れたもので, 自己同型群 (automorphism group) と呼ばれる.

^{*4} S の Λ への左作用を $\blacktriangleright: S \times \Lambda \longrightarrow \Lambda$ と書く.

定義 4.3: G -対称な格子模型

bosonic な格子模型 \hat{H} が G -対称 [?, p.12] であるとは,

- 群準同型 $\rho_{\text{spa}}: G \longrightarrow S$
- 群準同型 $\phi_{\text{int}}: G \longrightarrow \{\pm 1\}$
- 群のユニタリ or 反ユニタリ表現 $\rho_{\text{int}}: G \ltimes_{\rho_{\text{spa}}} S \longrightarrow \{\text{unitary or antiunitary operator } \mathcal{H}_{\text{tot}} \rightarrow \mathcal{H}_{\text{tot}}\}$

が存在して以下を充たすことを言う:

(Gsym-1)

$\forall g \in G$ に対し,

$$\phi_{\text{int}}(g) = \begin{cases} +1, & \rho_{\text{int}}(g) \text{ is unitary} \\ -1, & \rho_{\text{int}}(g) \text{ is antiunitary} \end{cases}$$

(Gsym-2)

群 G の \mathcal{H}_{tot} への作用

$$\begin{aligned} \rho: G &\longrightarrow \text{GL}(\mathcal{H}_{\text{tot}}), \\ g &\longmapsto \left(\bigotimes_{\mathbf{x} \in \Lambda} |\psi_{\mathbf{x}}\rangle \longmapsto \bigotimes_{\mathbf{x} \in \Lambda} \rho_{\text{int}}(g, \rho_{\text{spa}}(g)^{-1} \blacktriangleright \mathbf{x}) |\psi_{\rho_{\text{spa}}(g)^{-1} \blacktriangleright \mathbf{x}}\rangle \right) \end{aligned}$$

に関して,

$$\forall g \in G, \quad [\hat{H}, \rho(g)] = 0$$

が成り立つ.

G -対称な格子模型全体の集合を $\text{Lat}_G(\Sigma^{(D)}) \subset \text{Lat}(\Sigma^{(D)})$ と書き^{*5}. その基底状態全体の集合を $\text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)}) \subset \text{Gnd}(\Sigma^{(D)})$ と書く.

定義 4.4: G -同変な量子相

2つの **bosonic かつ G -対称な格子模型** $\hat{H}_0, \hat{H}_1 \in \text{Lat}_G(\Sigma^{(D)})$ を与える.

- \hat{H}_0 の基底状態 $|\Phi_0\rangle \in \text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)})$ と \hat{H}_1 の基底状態 $|\Phi_1\rangle \in \text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)})$ が同じ G -同変な量子相 (G -equivalent quantum phase) にあるとは, C^∞ 曲線 $\hat{H}: [0, 1] \longrightarrow \text{Lat}_G(\Sigma^{(D)})$ が存在して $\hat{H}(0) = \hat{H}_0$ かつ $\hat{H}(1) = \hat{H}_1$ を充たすこと. これは $\text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)})$ 上の同値関係を成す.
- 商集合 $\text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)}) / \sim$ の元のことを G -同変な量子相と呼ぶ.

^{*5} $\text{Lat}(\Sigma^{(D)})$ からの subspace topology を入れる.

定義 4.5: SPT 相 (Chen-Gu-Wen による)

bosonic かつ **gapped** かつ **G -同変な量子相** $[|\Phi\rangle] \in \text{Gnd}_G(\Sigma^{(D)})$ が **SPT 相** (symmetry protected topological phase^a) であるとは, $\forall |\Psi\rangle \in [|\Phi\rangle]$ が **SRE 状態**であることを言う.

^a symmetry protected trivial phase と呼ぶこともある [?].

つまり, 任意の代表元が G -対称性を破れば separable な状態に滑らかにつながるような **量子相**のことを SPT 相と呼ぶ. SPT 相の名前はこのことに由来する.

4.1.3 Fermionic SPT 相

4.2 Bosonic SPT 相の分類：群コホモロジーによる方法

[?, p.16, VIII] は, Dijkgraaf-Witten 理論を用いて^{*6}かなり多くの **SPT 相**を書き下す系統的な方法を発明した. この節ではその方法を紹介する.

簡単のため, **G -対称な格子模型**のうち群準同型 ρ_{spa} が自明なもの^{*7}のみ考える. また, G は局所コンパクト^{*8}であるとする. このとき G は Haar 測度を持つのでそれを $\int_G dg$ とおく. このとき, 非ゼロな $|\psi\rangle \in \mathcal{H}_x$ を 1 つ固定して $\forall g \in G$ に対して

$$|g\rangle := \rho_{\text{int}}(g) |\psi\rangle$$

とおくと, Haar 測度の左右不変性から族 $\{|g\rangle\}_{g \in G}$ は**一般化コヒーレント状態**を成す. ここで $\forall \{g_x\}_{x \in \Lambda} \in \prod_{x \in \Lambda} G$ に対して

$$|\{g_x\}_{x \in \Lambda}\rangle := \bigotimes_{x \in \Lambda} |g_x\rangle \in \mathcal{H}_{\text{tot}}$$

とおこう. さらに以下では G は**離散群**であるとする.

^{*6} 彼女らの論文においては Dijkgraaf-Witten 理論との関連は明示的に書かれていない. [?] には顕に書かれている.

^{*7} i.e. $\forall g \in G$ に対して $\rho_{\text{spa}}(g) = 1_S$

^{*8} 任意の点がコンパクト近傍を持つ

命題 4.2: SPT 相の構成

- 空間多様体 Σ を境界にもつ $D+1$ 次元多様体 $\mathcal{N}^{(D+1)}$
- $\mathcal{N}^{(D+1)}$ の三角形分割 $|K| \xrightarrow{\sim} \mathcal{N}^{(D+1)}$ であって、その 0-単体（頂点） K_0 が $\partial\mathcal{N}^{(D+1)}$ において格子 Λ を再現するもの
- $\omega \in H_{\text{Grp}}^{D+1}(G, \text{U}(1))$

をとる。このとき

$$|\Psi\rangle_\omega := \frac{1}{|G|^{|\Lambda|}} \sum_{\{g_j\}_{j \in K_0}} \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \omega(g_{j_0}, \dots, g_{j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}} \left| \{g_x\}_{x \in \Lambda} \right\rangle$$

は **SPT 相** の代表元である。ただし $\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}$ は $D+1$ -単体 $\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}$ の向きである。

証明 まず、 $|\Psi\rangle_\omega$ が **G-対称** であることを示す。実際 $\forall \{g_x\}_{x \in \Lambda} \in \prod_{x \in \Lambda} G$ および $\forall g \in G$ に対して

$$\begin{aligned} \left\langle \{g_x\}_{x \in \Lambda} \left| \rho(g) \right| \Psi \right\rangle_\omega &= \left\langle \{g_x\}_{x \in \Lambda} \left| \bigotimes_{x \in \Lambda} \rho_{\text{int}}(g) \right| \Psi \right\rangle_\omega \\ &= \left\langle \{g^{-1} g_x\}_{x \in \Lambda} \left| \Psi \right\rangle_\omega \right. \\ &= \frac{1}{|G|^{|\Lambda|}} \sum_{\{g_j\}_{j \in K_0 \setminus \Lambda}} \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \omega(g_{j_0}, \dots, g_{j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}} \\ &= \left\langle \{g_x\}_{x \in \Lambda} \left| \Psi \right\rangle_\omega \right. \end{aligned}$$

が成り立つ。ただし 3 つ目の等号でコサイクルの左不変性を使った。

次に、 $|\Psi\rangle_\omega$ が **SRE 状態** であることを示す。簡単のため $\Sigma = S^D$, $\mathcal{N}^{(D+1)} = D^{D+1}$ の場合を考える^{*9}。このとき $K_0 \setminus \Lambda = \{*\}$ となるような三角形分割をとることができて、

$$\begin{aligned} |\Psi\rangle_\omega &= \left(\sum_{\{g_x\}_{x \in \Lambda}} \prod_{\{j_0, \dots, j_D, *\} \in K_{D+1}} \omega(g_{j_0}, \dots, g_{j_D}, g_*) \left| \{g_x\}_{x \in \Lambda} \right\rangle \right) \bigotimes_{x \in \Lambda} \left(\frac{1}{|G|} \sum_{g_x \in G} |g_x\rangle \right) \\ &= \left(\prod_{\{j_0, \dots, j_D, *\} \in K_{D+1}} \sum_{\{g_{j_n}\}_{n=0}^D \in G^{D+1}} \omega(g_{j_0}, \dots, g_{j_D}, g_*) \left| \{g_{j_n}\}_{n=0}^D \right\rangle \right) \bigotimes_{x \in \Lambda} \left(\frac{1}{|G|} \sum_{g_x \in G} |g_x\rangle \right) \end{aligned}$$

と書けるので **SRE 状態** である。

最後に、 $|\Psi\rangle$ が属する **SPT 相** が $\omega \in H_{\text{Grp}}^{D+1}(G, \text{U}(1))$ の代表元の取り方によらないことを示す。実際、 D -コチェイン $\eta \in C_{\text{Grp}}^D(G, \text{U}(1))$ に対して $\omega \mapsto \omega \cdot \delta\eta$ と取り替えると

$$|\Psi\rangle_{\omega \cdot \delta\eta} = \left(\prod_{\{j_0, \dots, j_D, *\} \in K_{D+1}} \sum_{\{g_{j_0}, \dots, g_{j_D}\} \in G^{D+1}} \eta(g_{j_0}, \dots, g_{j_D}) \left| \{g_{j_n}\}_{n=0}^D \right\rangle \right) |\Psi\rangle_\omega$$

となるが、この変換は明らかに $\rho(g)$ と可換なので G -同変な **局所ユニタリ発展** である。 ■

^{*9} 一般の場合でも、 C^∞ 多様体は CW 複体の構造を持つので問題ないと思われる。

Dijkgraaf-Witten 理論との関係は、大域的 G -対称性をゲージ化することにより明らかになる [?, AP-PENDIX E]. ゲージ化によって、 $\mathcal{N}^{(D+1)}$ の三角形分割の 1-単体 (辺) $e \in K_1$ 上に G の元 h_e が指定される. ただし、 G が離散群なので h_e は平坦接続でなくてはならない. よってもし 3 つの 1-単体 e_1, e_2, e_3 がある 2-単体 d について $\partial_i^2(d) = e_i$ を充たすならば

$$h_{e_1} h_{e_2} h_{e_3} = 1_G$$

が成り立たねばならない. また、「物質場」 g_x とゲージ場 h_e のゲージ変換は、 $\{k_x\}_{x \in K_0} \in G^{|K_0|}$ を用いてそれぞれ

$$\begin{aligned} g_x &\mapsto k_x g_x, \\ h_e &\mapsto k_{\partial_1^{-1}(e)}^{-1} h_e k_{\partial_0^1(e)} \end{aligned}$$

のようになる. 故に、命題 4.2 の構成で用いた「物質場」の分配関数

$$Z(\{g_i\}_{i \in K_0}; \mathcal{N}^{(D+1)}) := \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \omega(g_{j_0}, \dots, g_{j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}}$$

は G -対称性のゲージ化によって

$$\begin{aligned} &Z_{\text{gauged}}(\{g_i\}_{i \in K_0}, \{h_e\}_{e \in K_1}; \mathcal{N}^{(D+1)}) \\ &= \frac{1}{|G|^{| \Lambda |}} \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \omega(g_{j_0}, h_{j_0 j_1} g_{j_1}, h_{j_0 j_1} h_{j_1 j_2} g_{j_2}, \dots, h_{j_0 j_1} \cdots h_{j_D j_{D+1}} g_{j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}} \\ &= \frac{1}{|G|^{| \Lambda |}} \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \alpha(g_{j_0}^{-1} h_{j_0 j_1} g_{j_1}, g_{j_1}^{-1} h_{j_1 j_2} g_{j_2}, \dots, g_{j_D}^{-1} h_{j_D j_{D+1}} g_{j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}} \end{aligned}$$

になる^{*10}. ゲージ場を外場と見做すことにより Dijkgraaf-Witten 理論の作用が得られる:

$$\begin{aligned} &\sum_{\{g_j\}_{j \in K_1}} Z_{\text{gauged}}(\{g_i\}_{i \in K_0}, \{h_e\}_{e \in K_1}; \mathcal{N}^{(D+1)}) \\ &= \prod_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\} \in K_{D+1}} \alpha(h_{j_0 j_1}, h_{j_1 j_2}, \dots, h_{j_D j_{D+1}})^{\epsilon_{\{j_0, \dots, j_{D+1}\}}} \\ &= e^{2\pi i \langle \gamma^* \alpha, \square \rangle} \end{aligned}$$

以上の議論により、 D 次元の bosonic な^{*11}SPT 相の分類は $H_{\text{Grp}}^{D+1}(G, \text{U}(1))$ によって成される, などと言う [?].

4.3 Bosonic SPT 相の分類: Ω -スペクトラムによる方法

上述の群コホモロジーによる bosonic な SPT 相の分類は低次元においては十分有効だが、高次元だと不十分になったり、逆に細くなり過ぎることが知られている [?]. 現代的には一般コホモロジー理論によって分類することが多い [?]. その際には、そもそも局所ユニタリ発展は使わずに SPT 相を定義する.

^{*10} このゲージ化の方法は、理論のゲージ不変性を要請することによって得られる.

^{*11} より正確には G が離散群でかつ on site symmetry のとき

4.4 Levin-Wen 模型
